平成 26 年 4 月 26 日

「はじめの一歩」

徳島文理大学　香川薬学部薬学科　6 年

竹中　雄亮

東日本大震災から 3 年目を迎えようとした 2013 年 9 月、私は復興支援ボランティアとして宮城県東松島市に向かいました。震災から 3 年目を迎えようとしていても、未だに震災の影響が色濃く残る現状や復興を成し遂げようと力強く前に進んでいる人々の姿について、自分自身の目で見て、耳で聞いて、肌で感じてきたことをお伝えしたいと思います。

まず初めに、私がボランティアに参加した経緯についてから説明したいと思います。大学生活では高校生活では出来なかったことをしようという気持ちで大学に入学しました。しかし、特に何の活動もしないまま大学生活が刻々と過ぎていきました。そして、2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が起こりました。テレビから流れる映像はまるで自分の住んでいる日本で起きていることとは思えない程の出来事で、大変ショックを受けたと共に、多くの方々と同じように何か自分にも役に立つことが出来ないかという気持ちを抱きました。しかし、あまりの事態の大きさと自分に何が出来るのかということを考えてしまい、一歩を踏み出す事が出来ませんでした。そして月日が経ち、病院・薬局における実務実習が始まり、実習先の病院の薬剤師の先生方から震災の際に医療支援として被災地で活動された際の話を聞く機会があり、今までテレビやインターネットを介してしか知ることの出来なかった震災直後の被災地の現状を知りました。さらに薬局実習に入った頃、実習先の薬局で震災当初から継続的に支援活動を行っているグループのメンバーである調剤薬局事務の方と知り合い、ボランティアを募集しているという話を聞きました。その話を聞き、一歩踏み出せなかった昔の自分を変える機会であり、これ以上月日が経ち風化する前に被災地の現状を、テレビ画面を介してではなく、自分の目で見ておかなくてはいけないと感じ、事務の方と意気投合の末、震災復興支援ボランティアに参加させて頂きました。

ボランティアは週末の土日を利用して、１日の実習終了後に、宮城県行きのバスに乗り込み一泊三日の日程で行いました。活動先である宮城県東松島市は津波により大きな被害を受けた地区であり、活動初日は、津波により自宅を失った方々が入居されている仮設住宅にお邪魔し、食べ物や飲み物が全て無料の秋祭りを開催しました。初めは、地元の方とうまく打ち解け合う事が出来るかとても不安でしたが、皆さんとても温かく接して下さり、すぐに輪の中に入ることができました。震災後のボランティアというと瓦礫の撤去作業や家屋の復旧作業という事が頭に浮かびますが、秋祭りという形での心の支援活動は、震災後の少し落ち着いてきた頃だからできる事だと思います。私は、食べ物の出店係として活動したのですが、同じボランティア参加者の方で楽器を持参して演奏されたりして、子供から高齢者にかかわらず、みんな一緒になって楽しい時間を過ごしました。秋祭りの中で、小学生くらいの子供たちが元気よく走り回っている姿は大震災があったことを感じさせないものでしたが、地元の方から「あの子達の両親は津波の被害にあって、今はおばあちゃんと仮設住宅に住んでいるんよ」という事を教えて頂いたとき、一気に現実に直面することになりました。さらに、近くに高台がなく、今の仮説住宅は津波が来た場所に建っているということも教えて頂き、仮設住宅が津波の被害地に建設されているというニュースの報道の場所に自分がいることを知りました。

秋祭り終了後は、津波の被害から復旧された民宿で１泊お世話になりました。ここでも、民宿の方から、民宿の一階部分が津波の浸水被害にあったことや、食糧不足に陥ったときの話、民宿を再び営むことができるまでに多くのボランティアの助けがあったことを教えて頂きました。

活動二日目は、石巻湾に面する野蒜地区での震災瓦礫の撤去作業を行いました。津波の影響で様々な物が山の中腹まで押し流されており、そのほとんどが家屋の資材や生活用品でした。現地で活動をされているグループの方からは、道路付近や重機が通れる場所の瓦礫は撤去できても、それ以外の場所は人の手で撤去作業を行う必要があり、まだまだ残っているのが現状ということを聞きました。また、撤去作業を行うにあたり、多くの人が亡くなられた場所であるため、黙祷を行い、個人の思い出の品を発見した場合はしっかり保管するなどの指示を受けました。震災から月日が経過している中で、瓦礫

をただ撤去するのではなく、亡くなられた方に対して礼節を重んじ、被災された方の数少ない思い出を大切に取り扱う姿勢は同じ日本人としてとても誇りに思いました。

今回、初めてボランティアに参加させて頂き、本当に多くの方々と知り合え、お話をすることが出来ました。その中で、震災が残した傷が本当に大きいという事を実感しました。けれど、心の中に大きな傷を抱えながらも懸命に前に進もうとされている被災地の人々や、地元の方と一緒になって復興を成し遂げようと尽力されている人々の姿をたくさん見ることが出来ました。そして、短い時間ではありましたが、同じ目的のために一緒に活動したボランティア仲間の方々は、私にとって一生の思い出に残る存在です。

新たなことに１歩踏み出す事はとても勇気のいることだと思います。自分の生活環境以外の土地や面識のない人々の輪の中に入ろうとすると尚更です。しかし、一歩踏み出す事で得られるものはとても大きいと思います。2011 年には、勇気がなく一歩を踏み出せなかった私ですが、実習先で医療支援に行かれた薬剤師の先生方やボランティア活動をされている事務の方に出会えたことが、今回、私に一歩を踏み出す勇気を与えてくれました。

私は現地に行きましたが、ボランティア活動は様々な場所で行われており、活動内容も様々です。また、参加するのに早いも遅いも関係ないと思います。この話が皆さんの一歩を踏み出す一つのきっかけになれば幸いです。

最後になりますが、私に一歩を踏み出すきっかけを作って下さった方々や見ず知らずの私を温かく迎え入れて下さったボランティアグループの皆さん、活動先の地元の方々に深く感謝致します。また、このような形で皆さんにお伝えできる場を設けて下さった高橋先生に深く感謝致します。

写真 1 秋祭りの準備風景

写真 2 秋祭りの風景

写真 3 秋祭りの風景

徳島にあるボランティアグループなので、秋祭りの最後はみんなで阿波踊りを踊りました！！
踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら 踊らな損々…

写真 4 秋祭りの最後に阿波踊り

津波により山の中にもたくさんの
震災瓦礫が散乱している！
人の手でないと回収できない。

写真 5 震災瓦礫撤去作業風景

写真 6 回収した品々

写真 7 約 4 時間における撤去作業の成果

小学校が消防本部として利用されている。

写真 8 町の様子

写真 9 津波の被害を受けた電車の駅と周辺施設

写真 10 ボランティア仲間のみなさんとの一枚